SDGs×ユーモア展オープニングトーク　対談録

2023 年 2 月 14 日

小平「こんにちは。今日は、新しく２月１４日からシン・オープン・ラボで SDGs×ユーモア展ということで本田亮さんを迎えて開催いたします。よろしくお願いします。」

本田・中島「よろしくお願いします。」

小平「もともと私と中島さんと色んな地球環境の話をした時に、こんな良いカレンダーがあるよ、本田君からもらったんですと。僕たち（小平・本田）は大学一年生から同級生で、５０年の付き合いなんです。
　それでいいなと思って中島さんに見せたら、これは良いや、展示会をしたいということで今日決まりました。」

中島「はい。このカレンダーをいただいてお正月ずっと一月だけじゃなくて十二月まで全部めくって見ていて、絵だけじゃなくて言葉も入っているじゃないですか。すごく心に染みてきて、はら落ちするっていう感じかな。SDGs って腹落ちしないんですよ。正直言って。１７項あるけど、かっこいいことばっかり言っているじゃないかという印象が強くて。
　でも本田さんのカレンダーの、今回展示してもらっている絵を見ながら、それぞれがそうだよなと思わずうなずく場面ばかりだったので。これですね。（カレンダーをめくりながら）これをずっと見ていまして、私の中でこれをみんなに伝えてみようと。伝えると同時に、みんなこれを見てどう考えた？あなた自分で何を考えたの？ということをここで話しをしたいな、そんな場を作りたいなということで、無理なお願いをしました。」

本田「いえいえ。ぜんぜん無理じゃないです。」

小平「こういう機会があって、すごくうれしいと思うし、国連が作りました、どこどこが作りましたという、どちらかというと上から目線で、こうだって言われても、お勉強するのはするけど、実感も湧かないというか。僕たち大人が子どもたちにうまく説明しなきゃいけないですよね。やっぱりこういうわかりやすいイラストで表現するというのは最適なんじゃないかなと思うんですけど。」

本田「そうですね。SDGs と言うと、今、日本中で誰も彼もが、いろんな企業がこのバッチをつけている。（中島がつけているバッチを指さす）」

中島「うちも SDGs の企業なんですよ。」

本田「そういうことで前向きに取り組まなきゃという気持ちがあるけど、実際に SDGs に取り掛かろうとすると、ちょっと難しいじゃないですか。難しくてちょっと近寄りがたいような雰囲気があるので、SDGs の中に何が書いてあるのかをイラストで、ユーモアイラストで紐解こうということからスタートした。

やっぱり一番難しい問題を人に届かせるというのは、ユーモアなんですね。ユーモアがあるとみんな見てくれるんですよ。理解してくれようとするので難しい問題をユーモアにしようということで、僕は環境問題をテーマにした漫画を３２年間ぐらい書いているんですけど、環境問題の漫画から始まって今 SDGs になっている。元々僕のライフワークは難しい社会問題を楽しくわかりやすくするというテーマで今までやってきている。今まで環境問題とか原発問題とかダム問題とか化学薬品問題とか SDGs 問題とかいろんなものを書いてきたんですけど、とにかくユーモアが大事かなというふうに思っているんですね。

ユーモアだと小学生も見てくれておじいちゃんおばあちゃんも見てくれて、SDGs は遠い存在だったけどちょっとわかったような気がすると言ってもらえたりする。
それで先ほど中島さんが言ったように、これをベースにして僕はこういう思いで描いたけど、君はどう思う？どういうことを考えてどう感じたというのを議論してもらえると理解促進に役立つかなと。」

小平「いいですね。これを見て、君だったらどう描く？と描かせてもいいですよね。言葉と絵でもいいだろうし。これはだってすごくグローバルな世界じゃないですか？」

本田「そうですよね。本当に今回こうやって、こういう場所を貸していただいてやらせてもらっていいと思うのですけど、これは日本人より外国人の方が食いつきよいと思う。一コマ漫画の文化は外国の方は進んでいるので。」

小平「風刺とか、あの新聞でもありますよね？わりとそういう事に対して寛容というかね。」

本田「日本はどちらか言うと漫画文化はストーリー漫画とかアニメーションの方にいくじゃないですか。外人は一コマで、この中にユーモアとペーソスを入れて笑ってもらうというか、感じてもらうというのは結構進んでいるので、それをやりたかったんですね。

だから僕のこの漫画で一番ありがたいというか、嬉しいなと思うのはこれを飾ってくれる人がいる。こんな難しいものを飾りたくないじゃないですか普通は。だけどカレンダーは毎年作っているのですけど、どうしてもこれがないと困るという人がたくさんいて、その人が必ず家に飾る。こんな重たい問題なのに飾ってくれる。飾ってくれて、楽しんでくれて、まあちょっと理解促進につながる。そういうのがいいかなと思っています。」

中島「今回自分が一ヵ月間じっくりと絵を見ていて、すごく大事な話だけど、仕事で忘れちゃうような話なんですよ。こういう環境に良いとかジェンダー平等とかの話は。でもこれを何気なくトイレで見ているとそうだよねって。」

本田「これトイレで貼られることが多いですね。三浦雄一郎さんが毎回トイレに貼っているから、トイレに貼るのがないと困るって。」

中島「トイレに入るとこういう問題も戦争問題も出てくるし、いろんな意味で身近なものにしてくれていますね。それはもともとユーモアこそが大事だと思っていたからですか？それとも絵を描きたかった？」

本田「元々、僕は電通という会社にいて CM プランナーをやっていた。CM の企画をやっていた。すごく伝わりにくい難解なとか、そういうような商品、情報がいっぱいある商品を十五秒という短い枠の中でいかに楽しくわかりやすく強く伝えるのがCMじゃないですか。その CM プランナーをずっとやっていたもんだから環境問題を CM に置き換えてみたんですね。環境問題をわかりやすく楽しくまあインパクトが強く伝えるには映像じゃないな、それはやっぱりユーモアがある一コマ漫画なんじゃないかなというふうに思ったんですね。」

中島「それは一コマ漫画以前に伝えたいという気持ちがすごかった？」

本田「そうなんですよ。すごく伝えたいという気持ちがあって。」

中島「そのきっかけは？」

本田「きっかけが３２年前に車でサハラ砂漠を横断したんですね。パリダカール・ラリーっていうのがあって、パリダカール・ラリーをどうしてもあの生で見たいって言うのでちょっと無謀な挑戦だったのですけど、パリで車を借りて、パリダカールと一緒にサハラ横断した。
　１か月ぐらいサハラを走ったんですが、その時にサハラのモーリタニア寄りのところで干上がった湖を見た。干上がった湖を見て、こんなところで湖が干上がっていると。そこにはたくさんの貝が落ちていて、そこには元々は漁民もいたみたいな話を聞いてものすごいショックを受けた。あの猿の惑星で自由の女神が最後こうなる。それと同じようなショックを受けたんですよね。なんか文明が終わるようなそういうショックを受けて。
　その当時も砂漠化という話はよく聞いていた。砂漠化砂漠化って新聞やテレビで見ていてもよく分からなかったんだけど、こんなふうにして湖が全部なくなっちゃって、そこに住んでいた人たちの生活もなくなっちゃうのかと思ってすごいショックを受けた。
　日本に住んでいるとそんなものは見えないじゃないですか。もうすごくおいしいものも

たくさんあるし、楽しいこともたくさんあるし、すぐそばに行けばコンビニがあるし、そういうすごく楽しい生活のずっと下の方で砂が崩れるみたいにどんどん地球の僕たちの幸せ崩れているんじゃないかって。
　砂時計で下の方が崩れているのに、上がわからない。そういうイメージを受けて、これは伝えなきゃならないと。これを伝えるのはどうしようと思って、一コマ漫画だなと思ったんです。僕は小平君と一緒で写真学科出身で、全く絵を書いたことなかったんですけど、じゃあもう絵を書くしかないということで絵の練習を始めた。」

小平「そうだね。最初の展覧会は僕も手伝いに行っているから。あの時はエコノザウルス。」

本田「そうそう。最初の展覧会の時を僕がやると言ったら周り中の人が写真展だと思ったんですよね。」

中島「写真学科ですもんね。」

本田「でもまぁ漫画という初めてのことを挑戦してみた。」

中島「それすごい。これはすごくいい話。やりたいものがあってそのあとに技術を身に付けていく。これすごいですよ。普通は自分のできるものでやりますから。」

本田「そうですね。」

中島「新しいことをやるなんて。」

本田「僕はこれをやるべきだとか、やりたいことを先に見つけると、それに合わせていく感じ。」

中島「合わせて行くトレーニング、訓練をしないとここまで書けないじゃないですか。どうやって勉強されたんですか？」

本田「勉強って、最初の一枚を書くのがものすごく大変でもう２か月らいかかったかな。かみさんに書き方を教えてもらったり、あとは広告代理店にいたのでたくさん絵コンテマンという絵を書く人がいるんですよ、その人に教わったりして。それでも本当に何枚も破って失敗して一枚目までたどり着きました。」

中島「なるほどね。私事なんですけど、私もコンピュータを勉強し出したのは、逆でしたよ。

コンピュータのその次のどう使いこなすかという世界のイメージがあって、これは道具として使いこなしたいと思って勉強しだした。独学じゃなくて夜学に 2 年通うんですけど、それで今がある。後から技術を必要な技術を身に付けた。そこは一緒ですね。」

本田「そうですね。だから僕は若い人たちによく話をする時に、技術を先に磨かない。すごく重要なのはアイデアだ。アイデアがあれば大体多くのことは成功するんじゃないかなと。だってこのアイデアがペンを持つと作家になって、アイデアがギターを持つとミュージシャンになるのだと思うんですね。でも真ん中のアイデアがないのに技術だけ磨いていると、それはスタッフになっちゃうんですよ。だから流行っているラーメン屋さん見てもアイデアがある。流行っているラーメン屋って、なるほどこんなメニューあるのかと。」

小平「なるほどね。考えているんだね。」

本田「アイデアがまず最初。アイデアがあって技術は後から磨けば大体人生成功するという話をする。」

小平「だから何ができるというのは武器をいっぱい持っているから成功する訳じゃなくて、何がしたいという何かやりたいことが出ていかないとダメなんだね。」

本田「そうそう。みんなすごく一生懸命技術を磨くことするんだけど、いや技術はいいのよ。だから僕の最初の漫画はめちゃめちゃ下手だったんだけどアイデアが面白い、ユーモアがあるって最初の展覧会が成功した。」

中島「アイデアはすごく上から下まで幅広いじゃないですか。どういうものでしょうね。アイデアってみんな思うんですけど、ピンキリでいっぱいアイデアの本があるんですよ。」

本田「アイデアはやっぱり人の心を動かすものだよね。人が心を動かす。今までにないものなんじゃないですかね。そういうことを発見できるかどうかが重要で、その周辺のテクニックを磨くことは二番手で良い。」

小平「でも、ぱっと閃いてぱっと出る訳じゃなくて、やっぱりそう生きている自分のブランドデザインの中でこのアイデアをうまく見つけ出すというかね。そういうふうに何にでも興味を持って見ていくというのは大切なことじゃないですかね？」

本田「そうだね。アイデアというのはいろんな知識の組み合わせだったりするからね。色んなものを今までたくさん積み上げてきたそれがこううまく組み合わさって新しいものにな

っていくと思う。アイデアの引き出しを増やすためにはできるだけたくさんのものを体験するとか、いろんなものを読んだり、見たりする。そうすると引き出しができるわけですよ。でも、引き出しがたくさんあってもアイデアができない人もいっぱいいる。引き出せない人。」

小平「でも全員がアイデアマンじゃなくても、得意不得意があって、そういうものを自分で選んでいけばいいわけであって。だからそういう意味ではねみんなが全員イラストの環境漫画家になる必要はなくてね、それぞれにみんなある訳だから。」

本田「そう、引き出せない人はなぜ引き出せないかというと頭が固いから。要するに面白がる気持ちがない。面白がる気持ちというのがものすごく重要で、人生を面白がるというか仕事面白いという気持ちがないと引き出しから出ないんですよ。引き出しが山ほどあっても。その二つの組み合わせで新しいものが生まれたと思う。」

小平「なるほどね。我々はちょっと引き出しいっぱい持ちすぎちゃって困っています。」

中島「面白がる。小平さんとこの間、付き合ってきて、常に面白がっていますからね。小平さんは。」

本田「いやすごく重要で、なんか例えばいろんなミーティングがあるときに、ジョークを言えないやつはダメだね。そういうずっと固い事ばっかり積み合わせではなく、先ほどのような固い会議もあると思いますけど、ジョークを言えるような環境ですると新しいものが生み出せるんじゃないかと思います。」

中島「そうすると、人間同士がこうやって会って、この空気伝わりながら、唾が飛んできそうな中でしゃべることによって生まれてくる部分、ジョークが許されている状況があると思う。今はリモートをやっていると機能的に議論はしているけど会話が成り立たない。」

小平「なるほど。」

本田「リモートというのは報告するにはいいですよね。業務報告だとか伝えたい事は。でもあれなかなかジョークって言いにくいですよね。」

中島「挟みにくいですよね。みんなが喋っちゃうと重なり合っちゃったりすることがありますからね。」

本田「だからリモートになってから会議が短くなりましたよね。」

中島「超絶に短い。合理的だしね。」

本田「そうそう。」

中島「生産性が上がっているかなと思うんですけど、何かを生み出せるかと言うと生み出せない。連絡事項ですからね。」

本田「いや本当そうですよね。まあリモートの良さもあるから、そういう連絡事項というのはそれとして。ただもう一つ、ものを生み出すためには人と人が会って、会議するとかお酒飲んだりするのも俺はすごく重要だと思っているんですけど。」

中島「それは電通の伝統じゃないですかね。そちらの業界の。そうでもそうやって生み出してきたんですよね。」

本田「そうですよね。とんでもないことが生まれるのはそういうところですね。」

中島「そういう文化が今失われている。」

本田「そうそう。必要な事を伝えたからそれでいいじゃんみたいな感じになっている。」

小平「お利口さんになり過ぎてですね。要領よく勉強して、要領よくやって、要領よく生きている。その要領よくやることが全然つまんないことだということかね。」

中島「それは小平さんが今、早稲田大学理工学一年生の授業で先生として教えていて感じますか？」

小平「感じます。でも要領よく勉強しているから、ちゃんと勉強しているから早稲田大学に来たってほめてあげます。なぜ来られたかというと自分で自分のことを考えて勉強する力が付いているから、突破していったんじゃないかなと。ただそれは受験のウルトラクイズになっているから今からはそうじゃないよねと。準備ができているからもっと発想を持って好きなことを見つけなさいというようなことを、僕は担当が大学一年生なのでそういう話をしているんですよね。」

中島「なんかすごい人気らしいね。十倍ぐらい倍率があると聞きました。」

小平「それは優しいからですね。落ちないから。」

本田「すぐ単位が取れるから。」

小平「そうそう。というのは厳しくしてテストをして勉強するという授業ではなくて楽しんで絶対落ちないけども絶対参加する、考えるという授業を目指しているもんですから。来年は定年で辞めますけども。」

中島「最後の絶対落ちない、これは SDGs の誰一人取り残さないというあの前文・宣言１７個の目標なんですよ。この宣言の中に書かれている。誰一人残さないというこれがすごく大事なことだと実践されていらっしゃる。もう SDGs を実践されていらっしゃるってことですね。」

小平「とんでもないです。でもあの中島さんも会社で部下をどうですかね。」

中島「やめてください。そういう質問は、怖いから。最近色々と大変なんですから。本当にどうも今日はありがとうございました。」

小平「本当にありがとうございました。」

本田「こちらこそありがとうございました。」